

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Mexican Americans : Resistance and Creativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00000791">https://doi.org/10.15021/00000791</a>

## 〔第四章〕・都市の時間と象徴

——ニューメキシコ州のサンタ・フェとタオス

文化人類学が無文字社会や民俗社会のみを研究対象にした時代は明らかに去った。だからといって、都市のような大きな対象を把握しえるかというと、まだ試行錯誤の段階だというより仕方がない。事実、都市そのものを研究するといふよりは都市に住む特定の人々や都市環境より派生する諸問題を扱ってきたのが今までの文化人類学の都市への接近法ではなかったかと思われる。私の場合もこの例にもれず、合衆国のニューメキシコ州の小都市へ足を運んだのはスペイン系やメキシコ系のアメリカ人の民族性と民族文化を知るためであった。しかしながら、このテーマを中心にして書き物をまとめている段階で既に、民族性では説明しきれないものがこの社会の背後で動いていることを感じていた。そして、さらに年月の過ぎ去った今、日本からニューメキシコのスペイン系アメリカ人（以下、イスパノと略す）が多く住む都市サンタ・フェとタオスを眺めてみると、都市を主題としてあの地の社会の書きかえが可能であることがわかる。都市は多義的な存在であって、とうてい一つの視点や理論によってその現実と本質を解き明かすことはできない。今回私が試みるのは時間と象徴を軸にして都市を素描してみることである。ここで取りあげる時間とは歴史の時と、日常の時と、祝祭の時の三つの時間である。また、ここでいう都市の象徴とは住民が時間をかけてつくりあげ、維持しようとしているライフ・スタイルを表現するような象徴である。そして、ここでいう住民とはイスパノ、インディアン、アングロの三民族グループの人々である。インディアンは今ではネ

イティヴ・アメリカンと称されているが、「プエブロ・インディアン」という名称との関わり上、ここではインディアンと書くことにする。アングロは白人系アメリカ人で、逆差別的表現であるが、ニューメキシコ州でのローカル・タームとして使うことにする。

### 一 時の流れのなかの都市

事例となる小都市、サンタ・フェとタオスは合衆国のニューメキシコ州北部に位置している。両市とも「一味違ふ都市」として、その特異性を誇っている。一体、何がこの特異性をつくりだしているのだろうか。視覚的にいえば、一つにはプエブロ・インディアンから由来するアドベ（日乾しレンガ）建築とイスパノの文化的伝統を表現する建物や史蹟であり「Thomas and King 1973」、二つには豊かな自然を背景にした、いとも住み易き生活環境である。この視覚的風景が可能になるにはそれなりの歴史的背景がある。

サンタ・フェとタオスが存在する地域は基本的には同じ流れの歴史を経験した。一一〇〇—一三〇〇年にかけてリオ・グランデ河沿いにプエブロ・インディアンの文化が發展していたが、一五四〇年にはスペイン人コロナードが到着し、ついで一五九八年のオニャーテによる植民活動開始以降、スペイン人による植民が進んだ。一六八〇年にはプエブロ・インディアンの反乱が起こったが、一六九二年にはドン・デイエゴ・デ・バルガスがサンタ・フェに無血入城し、この地を再征服した。以降、インディアンとスペイン人植民者は緊張関係をはらみながら共生し続け、一九世紀初頭にメキシコがスペインから独立すると、この地はメキシコ領となった。そして、一八三六年にはじまる合衆国とメキシコの戦乱が一八四八年にグアダルーペ・イダルゴ条約で終結をむかえ、ニューメキシコの地域は合衆国領となった。この荒々しきフロンテアにアメリカ人植民者が流れこみ、交易商人、鉱山業者、冒険者

などがのさばる場所となった。こうして、インディアン、イスパノ、アングロの三民族グループが共生することとなるが、この時点からイスパノの没落が徐々にはじまった。牧羊と小麦・とうもろこし生産が彼らの主な経済的基盤であったが、牧羊は一九〇〇年頃から衰退しはじめ、穀物生産は一九二〇—三〇年代に重要性を失ったからであった。一方、インディアンは一九三〇年代から進んだ合衆国のインディアン保護政策に乗って、固有の文化を保持し、社会的にも上昇しはじめた。また、一九三〇年代には新しいタイプのアングロが移住してくるようになり、この人々が現在の文化的なニューメキシコを代表するようになった。東部で活躍していた芸術家がユートピアを求めて移住してきたからであった。これにつれて、ニューメキシコの自然を愛好するアングロが徐々に増え、一九四〇—五〇年には隠退生活の場としてニューメキシコを選ぶアングロも多くなり、一九六〇年代以降は観光地として有名となり、現在に至っている。

右にみた大まかな時代の流れはニューメキシコ州全般にあてはまるが、地域により差異があり、個々の都市や町にはその小差が決定的に働いた。サンタ・フェとタオスはその好例である。

まず第一に、二つの都市の後年の発展の差異を象徴的に示す歴史的事件がある。サンタ・フェには、プエブロ・インディアンの反乱にとどめをさし、この地域を再征服したドン・ディエゴ・デ・バルガスが一九九二年に入場し、以降、同市はスペイン支配の中心地となった。一方、タオスに最初に足を踏み入れたスペイン人はコロナド探検隊の将校であったフェルナンド・アルバラードであるが、踏査をしたにすぎず、この地の歴史に決定的な要因を残すことはなかった。第二に、サンタ・フェは一九世紀に（一八二一—一八〇年代）合衆国中央部から西部にいたる幌馬車通商路サンタ・フェ道のターミナルとして重要度を増し、一八八〇年にサンタ・フェ鉄道に受け継がれてからも、鉄道の西の起点として栄えた。一方、タオスは一九二〇—三〇年代まで荒々しき西部の町のままであった。第三に、サンタ・フェは周辺のインディアンの交易の中心として機能し、現在でも夏期に催される全国インディアン

工芸市（イグレス）にみられるように、南西部インディアンの平和的交流の中心地である。一方、タオスは間近にタオス・プエブロを抱え、さらにナビホ、アパッチ、コマンチェなど遊牧タイプのインディアンに絶えずおびやかされながらイスパノの町として育ってきた。イスパノの町としてはかなり危なっかしい歩みを続けてきたわけである。第四に、サンタ・フェの芸術家集団は大きく育って組織的になったが、タオスのそれは数も少なく、組織化もあまり進んでいない。このことは住民の意識にもあてはまり、サンタ・フェでは民族グループの如何を問わず、アドベ建築に代表される都市の文化を保存しようとする意識が徹底しており、各種団体の努力が実って、法的にも都市計画が確立している。これに対して、タオスの人々の生活は動乱期にあり、都市計画も試行錯誤の段階にある。人々はサンタ・フェが一つのモデルでありうることをよく知っているが、モデルを実現するのはなかなか難しい。なぜなら、タオスのみならずサンタ・フェでも、モデルを実現したり維持していく担い手である住民の日常の生活には、かなりの困難さがあるからである。

## 二、日常の時の都市

現在、サンタ・フェもタオスも観光に大きく依存しており、外観は美しいが、住民の生活には貧富の格差が大きく、それが民族グループと高い関連を示すのが特色である。

サンタ・フェは四万一一六七人（一九七〇年）の人口を抱えているが、その七割弱がイスパノで、アングロが一万五〇〇〇人ほど、加えて様々な民族起源のインディアンが生活している。全人口の六〇パーセントが市、州、連邦政府の役所ないしは出先機関に職をえており、それ以外では、ホテル、モーター、レストランなどの観光業が主な就職口となっている。また、芸術家は一六〇〇人ほど居住し、テキサス州など合衆国各地からきた隠退生活者も

いる。市の商業会議所の資料「Santa Fe Chamber of Commerce 1976」によると、同市に大金持ちが三〇人もいるが、全人口の四分の一は失業対策に頼っており、フード・スタンプとよばれる切符をもらって、食物を購入している。この経済格差は就職の季節的変動が大きい観光都市としての経済基盤から由来している。そして、この格差はアングロ優位でイスパノとインディアンの劣位という民族差として語られそうである「Grimes 1976」。残念ながら、そのことを明らかにする具体的な資料を私はもっていない。

一方、タオスの場合、私は調査のために一時期住んでいたもので、経済格差と民族グループとの相関関係を具体的に指摘することができる。詳細は第三章でのべたので、少し繰返しになるが、その関係をのべてみよう。

タオスの町自体は人口が三〇〇〇人ほどであるから、本来は都市と呼ぶより町というべきであろう。しかし、タオス郡全体に散らばって住む約一万七〇〇〇人（その約七〇パーセントはイスパノ）もタオスの町を中心にして生活するので、現実には小都市のような活気を呈する。すぐ近くにあるタオス・ブエプロの居留地に住む約一二〇〇人のインディアンもタオスの町にでてる。

町の人々の生活は観光業でもっている。タオスの町と周辺の二つの集落に散在するホテルとモータールの数は六〇もあるが、所有者とマネージャーはほとんどアングロであり、イスパノやインディアンはメイドなど底辺のサーヴィス業に従事している。画廊は四六あるが、一店以外はアングロの所有である。また、芸術家は約五〇〇人住んでいるが、ほとんどがアングロである。ギフト・ショップとインディアン美術工芸品の販売店、卸し売り、製造業者は四〇店近くもあるが、アングロ経営者の数が圧倒的である。ドライヴ・インやテイク・アウトと呼ばれるインスタント食品店を含めてレストランの数は五六もあるが、イスパノが経営するメキシコ料理店は七店である。スポーツ用品店はすべてアングロ経営である。不動産、保険、銀行、金融関係はほとんどアングロ経営で、自動車関係にわずかにイスパノが入っている。町の五大スーパーマネージャーはすべてアングロで、イスパノは下級の雇用に甘

んじている。弁護士二四人のうち四人がイスパノ、歯科医は一人のうち一人だけがイスパノ、内科、外科医は全員アングロである。二つのラジオ局と週間新聞はアングロ経営である。本屋も四店のうち一店のみがイスパノの経営である。衣料、美容院、薬局、材木、建設業、タクシー会社、スクール・バス経営の分野にはイスパノがアングロに並んで進出している。

タオス・インディアンの立場はイスパノより劣勢である。インディアン工芸品を売る店のうちインディアン経営の店はわずか一店である。それに、タオスの町で職を得ているインディアンは数えるほどしかない。モカシン靴の製造会社も低賃金であるし、アドベ仕上げの仕事もイスパノと競合しがちである。

夏の観光シーズンにはサーヴィス業の仕事が多いが、一〇月以降の冬期には失業率が高まる。そのため季節に応じてばらつきがあるが、平均して四〇パーセント近い家族が社会保障の受益者となっており、インディアンとイスパノの占める率が極めて高い。

右のような経済状況を三民族の「伝統」文化との関わりから整理してみると次のようにいえる。この地に最後にきたアングロは今やこの町がよって立っている観光業界をつくり、インディアンの伝統文化を売り物にしている。アングロの芸術家にはインディアン物や西部物のテーマにたよる安易な人も多いし、近年では織物や彫刻などイスパノの伝統美術を習得する者さえ現れている。つまりアングロは先住の二民族の文化的伝統を先取りしつつ、タオスに進出している。一方、タオス・インディアンはリザヴェーションでは政府の保護政策をうけて暮らせるが、タオスの町では宙に浮いた存在である。インディアン芸術の旗手もタオス・プエブロからはまだでていない。そして、イスパノは郡や町の行政・教育面では優勢であるが(第三章参照)、経済的にはアングロの企業の間管理職や底辺の職に甘んじ、専門職では極めて少数の人がアングロと肩を並べているにすぎない。また、イスパノの伝統芸術をインディアン芸術に対抗できるものとして維持し、発展することにもまだ成功していない。つまり日常の時のタ

オスはアングロ支配の時である。

さて、右に見たアングロ支配の日常の時の流れに境界をつける祝祭の時のサンタ・フェとタオスが都市としてどのような様相を呈するかみてみよう。

### 三、祝祭の時の都市

サンタ・フェ市の守護聖人は聖フランシスコであり、毎年九月に大祭がある。九月の勤労感謝の日を入れて四日間催される。この祝祭を私は一九七六年九月に二日間見物している。しかし、一人で全体を見ることはできないので、以下の記述は自分の見聞を Grimes [1976] によって補充している。

祝祭の期間に見物客や観光客は多く、通常は四万台の人口は七―八万にふくれあがる。観光に依存している都市なので、この人出はありがたく、町をあげての祝祭への参加となるが、祝祭は本質的にはイスパノの時となる。祝祭の組織化は彼らを中心に進められるし、祝祭のテーマと象徴もスペイン系のものである。

祝祭を組織する母体はフィエスタ委員会で、委員は公募されるが、結果的には全委員の三分の二がスペイン系の人々になってしまっている。この委員会に次いで重要な「バルガスの騎士たちの会」は極めてイスパノ色が強く、それ以外の成員はわずか一〇パーセントにすぎない。バルガスの騎士たちの成員になった人は自動的に「ラ・コンキスタドール（征服の聖母）信徒団」の成員になる。なお、祝祭の中心像となるバルガスはバルガスの騎士たちより選出され、スペイン系の出自の人に限られている。次に、征服の聖母信徒団には男女を問わずニューメキシコ州全域から加入することができる。この聖母はカトリックのものであるので、当然のことながらカトリック系の人々が成員となる。祭りの女王とその宮廷は二人のインディアンを除いてはイスパノの女性が構成する。なお、バルガスと





サンタ・フェのサン・フランシスコ祭のために着飾った男たち

祝祭の女王の役にはスペイン系出自、スペイン語を話す能力、スペイン文化についての高度な知識が要求され、スペイン的であることの象徴として二人は選ばれる。なお、バルガスになる人は経済力と人望を兼ね備えていることが多く、政界進出への足場となる。

さて、祝祭の過程を追ってみよう。それは早朝の市長の演説からはじまり、次いでバルガスの騎士たちのためのミサがロサリオ礼拝堂であり、夕方には大聖堂でバルガスが騎士に叙せられ、同時に女王の戴冠式がある。夕方には、女王とお付きが女王座を埋め、女王のスピーチなどのショーがある。女王のお付きとは四人のスペインの女王、二人のインディアン女王と何人かのお付きで構成されている。二人のインディアン女王はプエブロとナビホから送りだされ、インディアン側から反対はない。女王のショーに次いで、ソソブラとよばれる布ばりの大きな人形が焼かれ、祭りの前夜祭の気分は最高に高まる。ソソブラは厄払い



バルガスのサンタ・フェ入場の上演

のための人形で、これを焼くことで日常の時から祝祭の時へと境界を越えたことが象徴されると考えてよからう。

主なイベントの内、バルガスのためのミサと叙勲、女王の戴冠式とショーは行なわれる場所も使われる象徴もすべてスペイン系である。ソプラは例外で、これは一九二〇年代にアングロの芸術家によって創案されたイベントであり、新しい要素も柔軟に吸収されていることがわかる。女王の宮廷にはインディアンも参加しており、祝祭の平和なイベントには気楽に参加していることが明らかである。

次の日はアメリカン・インディアンの日とされており、州知事の演説に続いてプエブロ・インディアンのようなダンスが演じられる。また、副次的な催物としてバルガスと女王の一般公開とダンス大会がある。

次の日はメイン・イベントの日なので、日曜になるよう日程が組まれている。大司教のミサの

後、「入場のページェント」といわれる劇がはじまる。市のはずれにある公園で、一六九二年に起こったバルガスのサンタ・フェ入場を再現する劇が演じられる。いわば、この地のスペイン支配開始を象徴するものである。劇はプエブロ・インディアンの反乱の首謀者ポペーと共謀者ナランホの長々しいスピーチではじまる。内容についてインディアンや一部のアングロから批判が絶えず、スピーチは毎年少しずつ修正される。次いで、当時サンタ・フェを治めていたインディアンの長ドミンゴとバルガスの話し合いがはじまり、バルガスはフランシスコ会修道士と兵隊を従え、無血の入場をする。この間、征服者を守ってきた聖母ラ・コンキスタドーラの像が横に置かれている。この入場が続いて、フランシスコ会修道士の祝辞がのべられ、ページェントは終了する。

この劇では、一方的にスペインの栄光がたたえられるが、これに対してインディアンからは批判があり、ポペーとナランホ役に出演拒否がなされ、仕方なくイスパノがこれらの役をつとめている。バルガス側の華美な衣装と対照的にインディアンの服装は貧弱なうえ、考証が不十分である。また、ドミンゴの従者にプエブロとナバホが混じっていたり、身体の塗り方も粗雑を極めている。このようなことがインディアンから批判され、出演を拒否される。また、スペイン支配を正当化するテーマの劇にインディアンとしては参加できないという明確な主張もある。一九六〇年代以降、ネイティヴ・アメリカンの復権運動は合衆国全土に普及しており、南西部でもその影響は大きく、意識の高まったインディアンがバルガス入場のページェントの上演に反対するのは当然のことである。

それではインディアンとアングロはどのようにこの祝祭に参加しているのだろうか。毎日、インディアンは美術工芸品の露店をひらき、見物客に売り、広場では各プエブロのダンスの会を開いている。彼らは実益をえながら、自らの民族文化を明確に提示しているのである。一方、アングロはファッション・ショー、メロドラマ、子供の衣装とベットのパレード、そしてウェスタン音楽の会を催している。

つまりサンタ・フェの祝祭のテーマと象徴はスペイン系のものであり、娯楽および周縁部門にインディアンやア

ングロの参加がみられるといえる。しかし、ここで疑問がでてくる。経済面、文化面で活動的なアングロがこの立場に甘んじているのだろうか。そこで、祝祭の変遷を調べてみると、この祭りが現在のようにイスパノ化したのは一九二七―七〇年の間のことであるとわかった。この期に、イスパノの努力が積みあげられて、祭りにイスパノ色が濃くなり、入場のページェントも確立し、女王の行事が加わり、一方インディアンの参加は減り、アングロは祝祭を組織する立場から買った見物したりする立場に移ったということである〔Grimes 1976: 190-191〕。その結果、現在のサンタ・フェの祝祭の時はイスパノの時になっているのである。

同じようなことがタオスについていえるだろうか。サンタ・フェとくらべながら検討すると、極めて興味深い現象がみられる。

タオスの町の大きな祝祭は守護聖人のサンティアゴの祭りで、七月下旬の観光シーズンのピークに一週間催される。資金はアングロとイスパノの商人と青年商業会議所が集めるが不充分である。祝祭の組織委員会は有志でつくられ、イスパノもアングロも参加している。

祝祭の過程を追ってみよう。私が見物した一九七九年の場合（詳細は第三章参照）、七月二六日に祭りの女王が選出される。候補者は全員イスパノの女性であり、スクオー（インディアン語で女の意）とよばれるすそ広がりのドレスを着て登場し、スペイン語でスピーチをしている間に資質を判定される。女王の戴冠式はグアダル―ペ礼拝堂で行なわれ、メキシコ風の服装をした男子につきそわれ広場にむかい、女王の披露と音楽がはじまる。サンタ・フェにおけると同様に、女王をめぐる行事はスペイン文化の枠組を使って進行しているのである。

二八日にはサンタ・フェの入場のページェントにあたる歴史行列がある。一九七九年には、この行列からイスパノのタオスでの存在を象徴する出し物が消えてしまった。行列の先頭には合衆国旗を掲げたシェリフと警官が立ち、全体として営林省や核エネルギーの模型の出し物などモダンなものが目立った。イスパノを代表するものとしては

開拓者の子孫たちと題された騎馬行列が賞を獲得したし、カトリックの結社であるコロンブスの騎士たちの行列もあった。ところが、伝統の歴史行列の先頭を飾るアルバレードとフランシスコ会修道士の姿が消えてしまった。そして、インディアンとしては営利目的のダンス・グループが一つ行列に入っただけであった。ちなみに、一九四〇年の記録「Taos County Historical Society n.d.」によると、歴史行列は先頭からインディアン—アルバレードとフランシスコ会修道士—初期アメリカ合衆国時代を代表する毛皮捕獲人—芸術家—近代のタオス（営林省、自営消防局、学校、教会）の順で、タオスに到着した民族順に配列されていたことがわかる。

タオスでアルバレードが姿を消したことはサンタ・フェの祝祭におけるバルガスの役割の重要性と対照的な現象である。確かに、バルガスはサンタ・フェのみならず南西部全域におけるスペインの歴史を象徴する人物であり、重要性は高い。それに対して、アルバレードはタオスに最初に来た将校というだけで象徴的価値はずっと低い。しかし、このアルバレード像が歴史行列から消えていくことはイスパノの意識の欠如の現れのようにみえる。何故なら、祝祭全般にイスパノの文化的特性の退潮がうかがえるからである。例えば、祝祭をにぎわす一七の楽団、歌手、奏者のうち、わずか五つのみがイスパノ音楽関係者であり、しかもその楽団にもアングロの成員が入っている。そして、イスパノ音楽の人気の低いのにくらべて、アングロやチカノ音楽には客がつく。イスパノの文化要素はダンス部門からも消えつつある。昨年までは植民地時代由来のロス・マタチネス(2)のダンスが近くの村や町から招待されて上演されていたのに、一九七九年にはこれもプログラムから消えてしまった。ところが、アングロの方は極めて活発に祭りをリードしている。財政難といいなながらもニューメキシコ音楽祭を二週間も続け、土地のアングロと観光客を楽しませた。また、連日、町の大きなホテルやレストランでファッション・ショーや子供のダンス・パーティーを開き、これも観光業に役立った。

右の見聞から判断する限り、タオス祭のテーマはぼやけ、イスパノの象徴や文化要素も退潮気味で、アングロの

行列や娯楽プログラムが発展しつつある。つまり、サンタ・フェの祝祭の時がイスパノの時であるなら、タオスの祝祭の時はイスパノとアングロが競合する混乱の時であるといえよう。

#### 四．象徴への収斂

確かにニューメキシコ州では都市や町の時間の流れは三民族の到着と拮抗の歴史に還元できる。そして、日常の時の都市はアングロ優勢の場となってしまう。日常の時に一つの境界をつくる祝祭の時のサンタ・フェではイスパノの文化的特性が顕在化するが、タオスではイスパノとアングロの両文化がせめぎあっている。こうしてみると、都市の生活は民族グループとの関連上説明できる可能性が高くみえる。

それでは民族的なるものがこれら二小都市の人々の生活を方向づける決定的要因かという点、そういうわけではない。日常の時や祝祭の時を越えて未来の時へと住民を導いていく要因がありそうである。例えば、サンタ・フェの場合、どの民族的背景をもっている、市民としての共通の価値観があり、それが市民生活を形成していくのに大きな役割を果たしている。この価値観は必ずしも古い文化遺産の維持のみを目的としていない。サンタ・フェ協会、フォークロア協会、サンタ・フェ歴史財団は「保存しながら新しくする」、「歴史は進歩を助ける」といったスローガンのもとに文化遺産を守っている。しかし、何よりも強く、恒常的にこの都市を支えているのは、アドベ建築で代表される人間的な美しい環境を愛好する人々の価値観であろう。様々な建築条例がありアドベ建築様式がこの都市の基調だときくが、その保持のために団結する人々はアドベ建築という都市の象徴のもとに統一されているといえよう。

都市計画が徹底し、アドベ建築のスタイルがデパートの建物にも採用されるサンタ・フェの場合、都市の象徴が

確立されているという印象を与えるが、元来は、象徴とそれを守っていく人間との関係は極めて動的なものであり、葛藤はさげがたい。タオスの例はその好例である。

一九七九年夏のタオスに起こった一連の環境保護運動（詳細は第三章参照）はさしずめヴィクター・ターナーな「社会劇」「ターナー 1981」と呼ぶものであり、一日一日の出来事が劇的に発展し、徐々にこの本質がみえていった。運動に参加する人々はイスパノとかアングロといった民族的背景の同一性で集まるのではなく、環境を守ろうとする意志により団結したのである。

発展途上中の観光都市タオスの最大の矛盾は水道、下水、道路、交通設備の未発達なところへ観光ビジネスが増加していることである。この状況に対して、住民は草の根レベルの根強い抵抗を行ってきた。一九七一年には観光客や移住者の誘致のために町の南側に大灌漑施設の建設が計画され、ビジネス関係者は支持したが、住民は反対で、三人の老イスパノが立ちあがり、アングロの作家 [Nichols 1974, 1978, 1981] と二人の弁護士が加勢して、計画をしりぞけた。一九七四年にも町の北側に大モーターを建設する案がだされ、イスパノかアングロを問わず、水質汚染をおそれる住民が反対運動をくりひろげ計画はつぶれた。この二回の運動で鍛えられた住民は一九七九年に起こった三問題にも果敢に立ちむかった。

第一に、広告条例で、商業主義に傾く、ビジネス関係者はアングロかイスパノを問わず、規制の少ない新条例を支持した。反対派は町的美観を守ろうとする環境保護主義者であり、アングロとイスパノの住民が入っていた。第二に、区画条例で、これもやはり、ビジネス側と環境保護主義者が争った。第三はスキー客でこむ地域の汚水処理設備の拡充の問題で、ホテルとモーター業界は賛成し、反対派の住民にはアングロとイスパノが含まれ、タオス市民集会を名づけられた環境保護主義者の連合を中核として活動した。

右の三件について、賛成派と反対派の陣容をみると民族による区分は効かない。賛成派はいつもビジネス関係者

でアングロが数的に多いが、イスパノの商人も入っている。反対派にはアングロもイスパノも入っている。つまり、水利と環境問題をめぐる抵抗運動はイスパノだけの団結ではありえず、同じ利益と目的を持つアングロとの連繋があつてこそはじめて効果的になるのが実状であり、共通の目的のために戦う多民族市民連合組織がタオスで重要になりつつあるのである。

では、この市民運動を支えるものは何であろうか。人々はタオスの美しく人間的な環境を守るために民族差を越えて集まっている。この町で執筆活動を続ける人気作家ジョン・ニコルズは『もし山がなくなったら』[Nichols and Davis 1979]という写真集の解説を書き、山に象徴される自然の美をタオスのライトモティーフとしている。私はこれにアドベ建築を加えたい。今、タオスでは経済力のない人はアドベの家を売り払ってトレイラー・ハウスに移らなくてはならない現実があり、アドベの家に住むことが、以前にもまして人々の理想になりつつある。

自然とアドベ建築の複合は住民がタオスに求める理想の生活スタイルの象徴である。余所者でもこのことを直感的に知る瞬間はある。サンタ・フェからハイウェイを北上し、溪谷にそって車をとばし、最後のカーブを終えたとき、急にタオスの連山が姿を見せる。この瞬間の美に感動しない人はいないが、集落が近づくにつれ、あちこちに薄茶色のアドベの家を見出し、小さなユートピアがここにあるような幻想におちいってしまう。そして、この自然とヒューマンな家がこの地の人々の探し求めているものの象徴だと私が気がついたのはタオスを去って日本に戻り、大都会の人の流れのなかに身を置いたときであった。さらに時間のたった今、タオスの市民運動の人々を想い出すと、日々の反対集会に汗を流す各人の姿は視界から消え、彼ら全体が自然とアドベ建築の複合という一つの象徴にむかつて収斂されているように思える。



